

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 栗林公園へいこう

講師 妹尾共子（高松市歴史民俗協会会員）

平成21年12月20日（日）

共催 高松市歴史民俗協会
高松市教育委員会

1 栗林公園

名勝 (大正11年3月8日 指定 大正13年11月26日 一部解除)

特別名勝 (昭和28年3月31日 指定 昭和47年7月11日 一部解除)

高松市街紫雲山の東麓部に位置する、林地部と平地部を併せて75・3503畝の面積を占める。

本園の始まりは、元龜、天正の頃、当地の豪族佐藤家により、築庭せられたものに基づくと言われる。

寛永初年、西嶋八兵衛が香東川の東の流れを大野中津で堰き止め西側の流れ1本とした。

生駒藩に仕えた佐藤志摩介道益が居宅と庭園を営む。

生駒家は寛永17年に矢島に移封せられた後、寛永19年松平頼重が、東讃岐12万石を領する。この時、佐藤家の居宅と庭園を引き継



ぎ拡大整備する。頼重隠居に当って、園内に御殿を建てて住む。二代頼常連年の干害続きで饑民の救済のため、池を掘り、山を築き労役に従う人に金穀を与え、木石を搬入する者に賞を与え大いに失業対策事業を実施し拡張整備を行う。元禄13年には、ほぼ形が出来る。三代頼豊、五代頼恭は更に大改造を加え、延享二年に完成し、園内の名所も改名された。頼重着任後、100年余の歳月を経て整う。以後松平家が11代228年間、下屋敷として経営した。

本園は、築庭時の南庭と明治期に市川之雄により大改修された北庭に区分される。

南庭は回遊式大名庭園の形をよく伝え、当時の作庭技法をよく保っている。

一部、小普陀付近の石組は、江戸時代をさかのぼること数百年前の手法と考察できる。

北庭は、備荒林として栗が植えられていたが、明治から大正にかけての大規模な改変で洋風化せられた。さらに、市美術館の跡地を、鴨場に復元する工事も平成4年に完了し、当時の鴨狩施設として、引き堀及び付属施設ができる。

建物は、生駒時代からの、大茶屋とよばれた掬月亭をはじめ日暮亭、新日暮亭など当時の姿を見ることが出来る。

橋は、偃月橋など15の名橋、池泉は南湖、北湖など六大水局、岩石は、小普陀、赤壁、飛猿巖、見返り獅子とぼたん石など貴重な岩石が配置されている。樹木は針葉樹のクロマ

ツ・アカマツ・ゴヨウマツ、コメツガ、ヒマラヤスギその他15種1,760本、広葉樹は94種9,480本他に低木類など総計172種34,000本程の名木、珍木が、なかでも県指定天然記念物のソテツ、根上りカシ等また、世界のどこにも見られない箱松、屏風松、さらには松平家老稲田家の屋敷にあった鶴亀松、薬園の人参木、栗林の名の基になった栗の木、江戸時代の絵図に示されているウバヒガンザクラ、根上りゴヨウマツ、各宮様のお手植松など、貴重な樹木がある。

栗林公園は、わが国はもとより世界的にも貴重なもので、完全な姿で後世に引き継がれなければならない。【香川の文化財 平成8年3月発行 香川県文化財保護協会 より】
なお、本年3月に発売された「ミシユラン・グリーン・ガイド・ジャポン」(ミシユラン観光ガイド日本編)で三つ星評価された全国56カ所の1つに入りました。

2 北門沿革

北門は藩政時代にはかいのぐち嶮口御嶮口御門は、藩主が出入する正門でした。
かぶらきもん冠木門

で嶮その右側に番所が建っており御門から通路の左右には一面竹林となっていました。

口という名称は中国の竹の名所「かいのたに嶮谷」にちなんで名付けたと言われています。嶮は谷あいの意味で、中国上代の黄帝(中国初代の皇帝)が、伶倫(音楽の名人)に命じて、谷あ

いの真竹を取り、12律の笛を作らせたという故事があります。

明治8年（1875年）3月、内務省から公園と認可されてから東門が正門となっていました。大正2年（1913年）北庭改修が完了したのを機に現在の石柱の門を作り、正門としました。昭和20（1945年）まで、正門として使われていましたが戦後は正門を東門に譲り今日に至っています。門柱は、小豆島産の花崗岩切石積みによる堂々とした門で、当時、多くの市民の耳目を驚かせたとのこと。

3 袖 石

門の左右の袖垣は、小豆島福田から大阪城築城の残石をここに移して用いたもので、右側2番目の切石にその由来を刻んでいます。

大坂築城余石

昔、豊臣氏大阪城ヲ築キシ時、石ヲ我讃岐小豆島ヨリ採リ、ソノ余石棄テテ海浜ニ有、今此園ヲ修ムニ当タリ、運搬便宜ノ為ニ之ヲ二、三ニ割リ採ツテ、門傍ノ垣ト為ス

大正二年三月

（昔、豊臣氏大阪城を築きし時、石を我が讃岐小豆島より採り、その余石を棄てて海浜に



袖 石

あり、いま園を修むに当たり運搬便宜のためにこれを二、三に割りとつて門の傍らの垣とした。）

4 松平頼壽 伯銅像

まつだいらよりなが

松平頼壽 明治7年（1874年）～昭和19年（1944年）

明治から昭和にかけての華族（伯爵）。旧高松藩

11代藩主頼聰の八男。昭和12年（1937年）

よりとし

から19年まで第10・11代貴族院議長を務めました。学習院高等科から大隈重信に傾倒し東京専門学校（現早稲田大学）邦語法律科卒業後、明治41年（1908年）に貴族院議員に列して以来、一時中断（1911年～1914年）を挟んで30年以上にわたって議員を務めました。教育者としても活動し、大正12年（1923年）に本郷学園（本郷中学校・高等学校）を設立。本郷区教育長も務めました。昭和8年（1933年）貴族院の正副議長は公爵・侯爵が就任するという慣例を破って副議長に就任し、4年後には近衛文麿の内閣総理大臣就任に伴い、議長に昇格しました。在任中に死去し勲一等旭日大綬章に叙せられました。



松平頼壽伯銅

5 栗林園二十有詠応教詩碑

5代藩主松平頼恭よしたかの命により、藩の儒者 青葉士弘あおばしこう

(注1) が明和7年(1770年)に園内の名所を詩に詠んだもので、この詩碑は昭和42年(1967年)に建立されました。当時は二十詠のうち飛猿巖の一篇が欠落して伝えられていたので、石碑の表には十九篇しか彫られていませんでしたが昭和55年(1980年)に発見され、石碑の裏面に付加する形で彫られ、ようやく二十篇が揃いました。

なお、昭和54年(1979年)に大平総理大臣(当時)の自筆の題字を付して、二十詠を屏風に作成したものを掬月亭に展示していますが、こちらから後から見つかった一篇は屏風とは別に展示しています。

(注1) 青葉士弘あおばしこう

江戸時代中期の儒者。元禄16年(1703年)7月生まれ。江戸の聖堂しょうへいどう(昌平黌の前身)で学び、享保11年(1726年)讃岐高松藩儒、5代藩主松平頼恭の時代には、政治顧問の立場にあつて砂糖、製塩、紙など産業の振興に貢献しました。また領下の教学興隆に



栗林園二十有詠応教詩碑

大きな功績を残し、詩文や書は堪能で『栗林園二十有詠応教』は有名です。また、儒者後藤芝山ごとうしざんらを育てました。記録所総裁をつとめ、明和9年(1772年)3月16日70歳で死去しました。著作に「訓蒙要術」「帝王紀略」などがあります。

6 商工奨励館

明治32年(1899年)に、藩主の別邸だった檜御殿の跡に出来たのが、香川県博物館です。帝室技芸員伊藤平左右衛門の設計で建築したもので、建坪270坪あり、栗林公園に調和した純日本式建築です。現在は、商工奨励館として漆芸をはじめとする県内産品を展示即売し、また伝統工芸品等の製作実演などをおこなっています。

7 讃岐民芸館

昭和40年(1965年)に開館しました。現在、新民芸館・



讃岐民芸館



商工奨励館

古民芸館・家具館・瓦館の4館からなっています。設計は山本忠司、内装デザインは和田邦坊、中庭の設計は中根金作の各氏の手によります。讃岐の民芸品・民具を保存展示。約4千点を收藏し、うち約千点を展示しています。

8 鴨場

江戸時代、北庭は群鴨池を中心として藩主が鴨猟をするための鴨場として使われていました。特10代藩主頼胤よりのたねが狩猟好きで、鴨猟の邪魔になるということで、池のまわりにあった栗の木を3本残して刈り取ってしまったという話があります。明治末期からの北庭大改修の際に、鴨場の施設はほとんど失われていましたが、平成4年に鴨引き堀、小覗（覗き小屋）等が復元されています。

現存する鴨場の内では最大規模で、飼い慣らした鴨をおとりに泳がせ、鴨を鴨引き堀に誘い込み、逃げ飛ぼうとする鴨を叉手網さであみで一網打尽に捕らえる仕組みです。当時の鴨引き堀は宇和島の天赦園てんしゃえんや、宮内庁埼玉鴨場などわずかししか残っていません。

9 東門・常磐橋



覗き小屋

藩政時代には切手御門と呼ばれ、藩士達が御切手（証明書）を示して通った通用門であったところです。門前の水路に架かる花崗岩製の重厚な石橋は、明治の末、高松城大手門前の外堀に架けられていた常磐橋を移したものです。この橋を渡れば、なだらかな紫雲山の緑の山脈を背景に、檜造りのいかめしい東門と、枝ぶりの良い松が見え隠れして、名園の玄関にふさわしい雰囲気を醸しています。

10 新日暮亭

新日暮亭は300年以上前、江戸時代初期の茶室様式を伝える大名茶室で、江戸初期の草庵茶室の様式を今に伝えていきます。扁額は2代藩主頼常よりつねの書いたものと言われています。南湖東端の吹上げの水流の西側に、延享年間（1744年〜1748年）までにあった茶室「考槃亭」こうはんていがその起りです。「考槃」とは「世間を避けて自分の思うままに楽しむ」の意味で、茶をたしなんだり、詩歌を詠じたり、杯を傾け曲水の宴を催したり、藩主た



新 日 暮 亭

ちの在りし日の風流を彷彿とさせます。その「考槃亭」がなんらかの事情で延享年間（5代藩主頼恭の時代）以後に現在の日暮亭（1898年建築）がある「会儂巖」かいせんがん東側に移築、席名は「日暮亭」と改められました。この茶室は幕末頃までこの地にありましたが、明治初年に旧藩士小田用平が藩主より拝領し、中野町の自宅に移築しました。その後、太平洋戦争中に岡野清豪（後の文部大臣）細谷喜一（香川県警察部長）、大内松次郎（菓子舗主人）らが中心となって、日暮亭の園内への復帰移転の運動を続けました。昭和19年（1944年）10月、かつて憂玉亭かつぎよくという茶室があった西湖東岸の現在地に移転工事が開始され、昭和20年（1945年）5月に竣工しましたが、現在の日暮亭がすでに建っていたため、名称は「新日暮亭」となりました。

【新日暮亭の変遷】

年代	場所	名称
延享年間まで（～1748年）	吹上げの水流西側	考槃亭
5代藩主頼恭時代～明治3年	日暮亭のやや東北	日暮亭
明治4年～昭和19年	高松市中野町小田邸	
昭和20年～現在	現在位置	新日暮亭

新日暮亭は吹上げにあった「考槃亭」以来250年間に場所・名称ともに三転するとい

う数奇な運命をたどりました。

【建物】

鳳尾塙ほうびろう（蘇鉄の丘）の西方会仙亭の北、西湖に接して建てられています。腰掛待合と茶室からなり、簡素な茶室です。腰掛待合はむかしの面影をそのまま残していますが、茶室は一部改造のあとが認められるものの、3回の移転にもかかわらずほぼ原型をとどめていきます。

【降り蹲踞つくばい】

枝折戸しおりとを開けて足を踏み入れ、飛び石を進むと3mほど先に降り蹲踞があります。茶客が下に降りて手を洗う手洗鉢のことで、茶道の上からも、栗林公園の歴史の上からもたいへん貴重なものです。材質は豊島石（凝灰岩）で、かつては手前にある井筒の中で水がゆつくりと渦巻いていたそうです。

11 掬月亭

南庭の中心にあり、江戸時代の初期に生駒家によって建てられ、歴代藩主が大茶屋とよび、最も愛用した建物です。中央の初筵しよえん観を含む7つの棟の配置が北斗七星に似ているところから、総名を星斗館とも呼んでいましたが、現在残っている五棟を掬月亭と呼ぶよう

になりました。

掬月亭は、南湖に面し、月の眺めが殊に良い所から、唐の詩人于良史うりようしの「掬水月在手いえなり、
弄花香满衣」の一句から名がつけられました。亭の横の根上がり五葉松は、11代將軍家斉よりひろ
から9代藩主頼恕に贈られたものが成長したものと伝えられています。



掬 月 亭



根 上 が り 松

【参考図書】

- 『香川の文化財』 平成8年3月発行 香川県文化財保護協会
- 『栗林郷土誌』 平成8年8月25日発行 栗林郷土史編集委員会
- 『讃岐の名園紀行 栗林・玉藻編』 平成2年1月20日発行 長岡 公
- 『わが町の文化財探訪』 平成19年3月31日発行 高松市文化財保護協会
- 『栗林園二十詠とその屏風の由来』 1997年発行 青葉翰於著
- 『第34回特別展高松城と栗林園』平成15年10月4日発行 高松市歴史資料館
- 『特別名勝 栗林公園』リーフレット 香川県栗林公園観光事務所発行

